



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

修学旅行先の模索：
系統性をもった修学旅行と安全性の確保を目指した
修学旅行作り(国際理解教育・現地理解教育)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-11-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 典史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174439

修学旅行先の模索

— 系統性をもった修学旅行と安全性の確保を目指した修学旅行作り —

前モスクワ日本人学校 教諭

愛知県名古屋市立楠小学校 教諭 中村典史

キーワード：修学旅行，安全性，系統性

1. はじめに

私が勤務したモスクワ日本人学校は2007年に40周年を迎えた、ヨーロッパでは一番歴史の古い日本人学校である。40年の中で、しばしば歴史の渦に巻き込まれ、例えばエリツィンによる連邦会議ビル砲撃の時に近くのオフィスビルに勤務中の多くの駐在員がその様子を目撃し、「(通称) ホワイトハウスがブラックハウスになった」と児童の一人が作文に書くほど、身近な問題であった。



赤の広場。様々な歴史の舞台になってきた。

ソ連崩壊後も治安問題は深刻で、モスクワの劇場占拠事件やベスランの小学校占拠事件、最近では地下鉄自爆テロなどチェチェンがらみの事件が後を絶たない。

実際に、モスクワに暮らす日本人学校の子供もたちは、中学生であっても単独での外出は許されず、登校・下校もスクールバスか保護者による送迎を大原則とし、友達の家遊びに行くときでさえ、自家用車かタクシーを使っている。それほどモスクワに対する保護者・学校関係者の治安評価は低いのである。

実はこの評価は必ずしも妥当なものではなく、長くモスクワに暮らす日本人に聞くと、学校や保護者の対応は行き過ぎているということをよく言われる。それでもこうした対応が取まらないあたりから、関係者の警戒レベルの高さをうかがうことができる。

そうした中で、ロシアに対して良いイメージをもっていない児童・生徒も少なくないため、学校教育の中では可能な限りロシアの良さを伝えようという取り組みが様々な場面を通して行われている。

ロシア語の授業の設置はもちろん、小学部においては社会科で消防署見学、郵便局見学、警察官の講演などを行い、中学部では校外学習でロシアの伝統や文化を感じられる施設を見学したり、総合的な学習でロシアのよさを見つける調べ学習をしたりしている。また、現地校との交流やロシアの伝統芸能の鑑賞など、全校行事の中でもできるだけ生のロシアとのふれあいを大切に、その良さを感じられるようにしている。

今回、私が取り上げたのは修学旅行であるが、中学部の修学旅行はほとんどがロシア国外でのものである。ロシア国外に出ることで、逆にロシアを見つめることができ、更にそれまで積み上げてきた学習との関係性をもたせながら活動を進められるように考えた。その経緯を述べるのが本稿のテーマである。

2. 修学旅行先の選定

(1) これまでの修学旅行

私の赴任したモスクワ日本人学校は全校在籍数約120名で、そのうち中学部が30名ほどになる。修学旅行は5月下旬に実施され、毎年1から3までの30名がそろっていくことになっている。そのため訪問先は毎年変える必要あり、この10年ほどはリトアニア→サンクトペテルブルグ→ラトビアの3か所を3年1巡サイクルで訪れていた。私が赴任した2007年はリトアニアを訪れる年で、その前年はラトビアを訪れている。リトアニアでは杉原千畝を

テーマに人権について、サンクトペテルブルグではピョートル大帝やロシア帝国などロシアの歴史について、ラトビアでは歴史的な建築とラトビアの歴史について学習するといった形で、各訪問先でテーマをもたせ、その前後の総合的な学習や10月に行われる学習発表会などでもそのテーマに沿った活動を行っていた。

(2) これまでの問題点

私は赴任2年目の2008年に修学旅行を担当した。前述のサイクルでいえば、サンクトペテルブルグを訪れる年であったが、サンクトペテルブルグを訪問するにあたり、2つの問題点が上がってきた。

① 学習の系統性

一つ目は、学習の系統性の問題である。前年の修学旅行での学習を次の年どう生かすのか、ということがこれまであまり考えられてこなかった。班別行動の計画の立て方や、修学旅行中のルール作りといった生活指導的な取り組みについては、実行委員会を立ち上げ、主体的に行っているため、前年の経験や反省を生かす取り組みがなされている。しかしテーマについては、その系統性があまり感じられず、行く場所が決まってからそこで学習できることを考えようというイメージが強かった。つまり、これまでの進め方では、去年あれを勉強したからそれを基に今年はこれを勉強しよう、といった動機づけが難しいということである。

② 安全性の確保

もう一つの問題は安全性である。私たちが次の訪問先を検討し始めた2007年8月、モスクワとサンクトペテルブルグをつなぐ鉄道で爆破テロがあった。この鉄道は、寝台列車が走っているため、その体験も兼ねて前回の2005年に利用していた。鉄道の利用をやめ、航空機で往復することも可能であるが、空港が市内から遠いということと、発着時間の問題、さらにはその便を飛ばしている航空会社や使用している旧ソ連製の機体の問題を指摘する声もあり、サンクトペテルブルグを次の訪問先にするのは困難であった。

以上の2点から2008年の修学旅行は訪問先を変更する方向で検討が行われた。

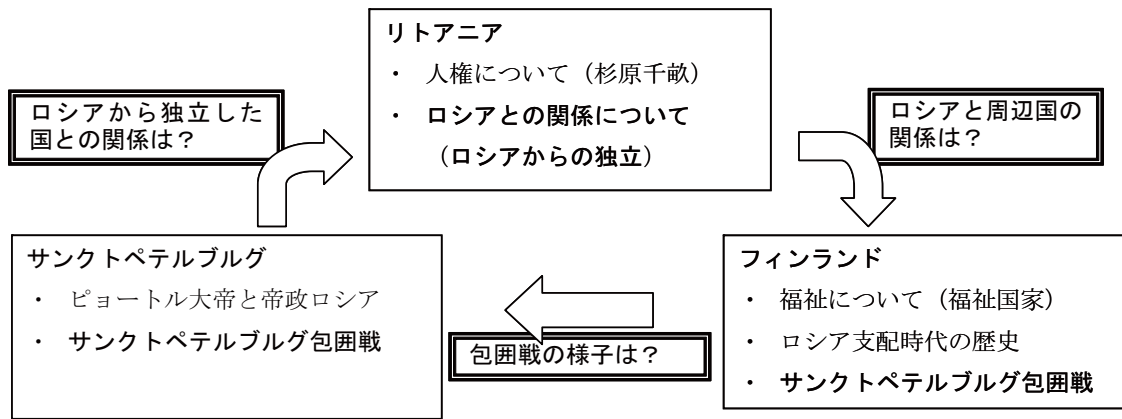
(3) 基本的な考え方

訪問先として最終的に検討されたのはフィンランドである。フィンランドはモスクワから飛行機で1時間強と近く、福祉国家として有名である。治安面でも申し分なく、後日ボランティアガイドをお願いしたフィンランド在住の日本人に話を聞いたところ、落とした財布が中身そのまま戻ってきたことがあるそうである。

また、フィンランドは帝政ロシア末期にロシアの自治領として支配され、独立後はナチスドイツと組んで第2次世界大戦中のサンクトペテルブルグを包囲し、戦後は国土の東半分を当時のソ連に賠償として差し出すという歴史をもっている。系統性から考えた場合、前年にリトアニアでロシアからの独立の過程を学習しているため、同じような視点から学習を組み立てられるのではないかと考えた。

また仮に、その次の年に治安問題が解決され、サンクトペテルブルグを訪問するにしても、今回フィンランドのサンクトペテルブルグ包囲戦の学習を進めておくと、逆の立場からの学習を組み立てることができ、系統性をもたせることができるのではないかと考えた。

さらに次の年、リトアニアを訪問するときには、前年度サンクトペテルブルグでロシアの歴史を学習しているの、旧ソ連に支配されていた国の独立の様子や現在の様子を学習しようという目標も立てやすい。以上のように考え、まとめたものが次の表である。



ただし、この系統性をもたせた修学旅行訪問先の選択には別の問題があった。本校に多い転出入の問題である。それまでの修学旅行を知らない新1年生、逆にこれで最後の修学旅行になる3年生は、学習の系統性が寸断されることになる。また、本校に多い転出入生徒にとっても、問題は同じである。例えば3年生や転出生徒がフィンランドで包囲戦の学習を進めても、その次の年サンクトペテルブルグを訪問することはできないのである。

そこで、それぞれの訪問地には、系統性からはずれた独自の学習内容も取り入れることが必要となってくる。そこで包囲戦の他に、フィンランド独自のテーマとして福祉についての学習も可能であることに注目した。リトアニアでは杉原千畝から人権とロシアからの独立、サンクトペテルブルグではピョートル大帝のころの帝政ロシアと包囲戦、といった形で、どの訪問地も系統性を意識したテーマと独自のテーマの二つを設定している。

3. 活動の実際

2008年5月20日から23日まで、フィンランドでの修学旅行が実施された。活動1日目はヘルシンキ大学で日本語を学ぶ学生との交流、2日目はヘルシンキ近郊のラハティという町で老人介護施設を訪問した後、各学年に分かれて幼稚園、高齢者福祉施設、託児所などを訪問した。3日目は各学年でヘルシンキ市内見学、4日目は国会議事堂見学といった内容である。

フィンランドでの修学旅行は初めてであったが、2日目の福祉施設訪問は、それぞれの学年で日本語の歌を紹介したり、日本の遊びを紹介したりと訪問先にあわせた取り組みをした。

3日目の市内見学では、自分の決めたテーマにそった施設を事前にリストアップし、現地の学習をしてきた。例えばヘルシンキの沖合数百mのところに浮かぶオウシメンリンナという島は、世界遺産にも登録されている過去の要塞であるが、スウェーデン支配時代からロシア統治時代までその支配者が変わるたびに掲げられる国旗から大砲の向き、島の名前まで変わっている。そうした場所を訪問し、大国に挟まれた歴史に触れ、その後の発表会の材料にしていた。

また修学旅行後の学習発表会ではフィンランドの作曲家シベリウスを題材にした劇を上演した。シベリウスはフィンランドがロシアから独立する頃に活躍した作曲家で、彼の作曲した「フィンランディア」という曲は、独立のシンボルとして独立運動中のフィンランド人の気持ちを支え、今でも第2の国歌として親しまれている。ヘルシンキ市内にはシベリウス公園もあり、生徒はこの公園も訪れている。



幼稚園への訪問。折り紙を教えている。



シベリウス公園訪問。

このシベリウスを題材にすることで、フィンランドとロシアとの関係を中学部全員が見直すきっかけとなり、修学旅行での学習が深まることになった。

また、安全性の確保という観点で、治安の良いフィンランドを訪問したのだが、それに加え今回は警備員をつけるということで万全を期した。現地では警備員の需要が少ないため人材が少なく、ロシアに比べてかなり割高になるということであったが、前述のように治安に対して敏感な保護者の様子を考えると、わが子が海外へ旅行に行くにあたって、警備員が常にいるという状況は相当な安心につながるだろうということから、あえて配置した。

4. 今後の課題

以上のように系統性と安全性の確保を目的として考えたフィンランドへの修学旅行であったが、いくつか課題が残った。

一つ目は次の年に行われたサンクトペテルブルグへの修学旅行で、フィンランドも加わっていた包囲戦が対ドイツ戦としてのみ扱われてしまったことである。これはサンクトペテルブルグにおける博物館等のスタンスに影響されている。現存の隣国を敵とすることをよしとせず、ナチスドイツのみに矛先を向けるその姿勢に影響され、包囲戦はナチスドイツとロシアとの戦いという形で学習が進められてしまった。

二つ目は修学旅行費の問題である。もともとフィンランドは消費税25%の福祉国家であるため、ホテル代や交通費などが他の国に比べると割高である。それに加えて、2008年のユーロ高、原油高が追い打ちをかけ、修学旅行費は例年の1.2割増しほどになった。例年決して安くはない修学旅行費であるため、この値段は中学生の修学旅行としては異例のものであり、この先フィンランドを続けていくかどうか検討するべきだということまできている。

ただし、ユーロ高、原油高はその後の金融危機でかなり解消しているため、為替の動向等も見ながら検討を進める必要がある。

三つ目の課題は、フィンランドがロシアに支配されていた歴史が長いこと、学習を進める中ではどうしてもロシアが支配者として悪者になってしまうことである。特に学習発表会ではロシアの圧政から独立する様子を劇にしたため、ロシア皇帝などは完全に悪役であった。これはロシアで生活し、ロシアの良さを発見しようとしている他の学習との整合性が取れなかった。このような時代を経て現在のロシアがどのように発展してきたかを、事後の学習内容の課題として押さえる必要がある。

5. まとめ

修学旅行というのは、本来学ぶべき課題をもって取り組まれるものである。しかし国内においては中学校生活の記念旅行のイメージが強く、私自身もそう思ってきた。その中で、モスクワ日本人学校はしっかりとテーマを定め、様々な行事に波及させることで修学旅行は学びの場であるという本来の目的を達成してきた。だからこそ、その流れを大切に、学ぶ意味から考えられるような企画、運営をしていくことが私たちに課せられている責務であると感じた。国内でもこのようなことを少しずつでも実現できていけたらと思う。